

空



2010・4

**SORA** 30号

流し雛

柴田 佐知子

寒鯛の強かな骨残りけり

目の失せし魚は深きに十二月

川はまだ闇を流れて飾り藁

誰ひとり乗せる気のなき宝船

書初や袂より腕突き出して

木のしぶき浴びて樹を伐る寒の明け

後戻りしたる山火の大いなる

雀の子母の日向の端つつく

来し方も行く末もなし流し雛

流し雛行けるとこまで行きまする

父が座すあたり動かぬ春の暮

わがままの数だけ老いてあたたかし

—「俳句」四月号より—

夕暮の端は根の国雪が降る

鈴つけし子を立春の道に置く

追剥のごとき貌なり猫の恋

古墳とも思へる裾の青き踏む

熱湯に卵音たて蝶の昼

目刺焼く母は火の丈ほど縮み

直情の背筋を芯に花衣

## 春の夢

高倉和子

美しき色の寄り合ふ雛祭  
何もかも片付いてゐる春の夢  
ふらここや自由と言ひて生き難し  
枕木の匂ひも少し土筆摘む  
近道をして初蝶に好かれたる  
亀鳴くや山より山の声のして  
草餅の重さをしばし楽しめり  
母と同じ爪の形もあたたかし  
耕して大きな靴となりにつけり  
鯉の水濁りて朧月夜かな



## 余寒

物売のこゑの伸びゆく片根雪

辻堂の裏に眉引く雪女

抱く犬に愛されてゐる日向ぼこ

人気なき部屋の鏡の余寒かな

毛糸玉セーターに愛移りゆく

種子蒔きて袋の写真見直せる

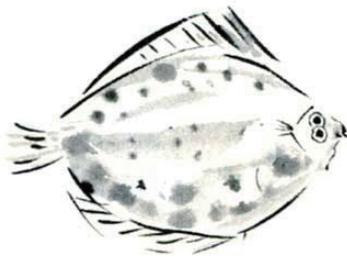
水音の風吹き上ぐる坐禅草

田楽の木の芽を採りに行きしとか

三月へ巻きのぼらんと蔓の先

玻璃戸よりハンカチ剥がし卒業す

中田みなみ



## 螺旋階

荒井千佐代

つばくらのよろこぶ軒の深さかな

本校と分校へだつ春の潮

細りたる舟釘を抜く桃の花

お涅槃の村の小さき空真青

けふも一と日紅も引かずにヒヤシンス

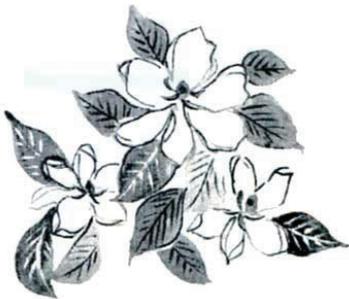
春野よりハライソまでの螺旋階

烏雲に血縁ときにくとましき

如月の織月は刃や汝を刺さむ

ぼとぼと木蓮不整脈はげし

誕生日忘れ雪など賜はりて



## 鳥雲に

服部 早苗

長考の肩に柚子の実触れて去る

マトリョーシカきれいに並べ日向ぼこ

藪巻をほどいてみせることのあり

藻塩草と書きとめておく初日記

梅探るプリンのやうな一日得て

冬泉めく高階のミュージウム  
ジョン・レンン・ミュージウム

春淡し遺品に煙管丸眼鏡

春愁や書き足して歌詞あふれをり

風光るジョンのまなざしヨーコの眼

アビイ・ロード・スタジオ残る鳥雲に



三

寒

鳳

蛮

華

地

球

大

地

真

理

目と鼻の先に晩年枇杷の花

大根引く地球に小さき穴ぽこぽこ

下げ潮に晒す川底寒の月

父母と火鉢を囲む日のありし

飢ゑるほど群れの膨らむ寒雀

九十九島ひとつひとつに春の闇

睡眠薬効かぬ寒夜の自我ひとつ

引く鳥の最後の雫光り落つ

印象派なら青を置く雪景色

柳葉魚焼く爆ぜるたまごは月の色

寒き地を叩きシャッター閉づる音

平らなる踏絵の裏も疼きたる

四温の町に三寒のガード下

重畳の山をひとつに霞みたる

亡き人の仕種偲ばれ寒厨

親柱残し新たな橋うらら

# 山桜

柴田志津子

# 冴返る

吉村 摂護

軍鶏は身を締めて闘ふもどり寒

水圧を地球に掛けて蓮根掘る

鮫鱈のてこでもといふ面構へ

鮫鱈をべつたべつたと積み上ぐる

落人に掟五箇条冬木の芽

玄海を打ち据ゑてゐる寒稽古

春着の子流す色なき紙雛

孤独死も潜んで居りし寒の闇

揺れながら頷きながら雛流る

冴返る人間は雑食の葦

機関車の地鳴り近づく山桜

さんさんと四温の光り勝手口

春泥を子の長靴は飽きず踏む

竜天に登りて巨船進水す

かへるかへろ天神様の夕桜

轟然とデゴイチ走る春野かな

天領

安武農子

山笑ふ

高倉恵美子

草萌ゆる戸毎にかかる古木橋

先に逝く幸せ思ふ冬桜

堰越ゆるるときを懸命春の水

寒行に新しき人加へけり

春月に波をはなるるうしほの香

人恋しくなりてあるなり日向ぼこ

指先でタンゴのリズム春炬燵

長生きの女ばかりの針供養

天網をそれしひばりの声と聴く

祖父と孫の話ちぐはぐ建国日

恋猫の罷り通りし面構へ

大声で話す夫婦に春立てり

遠景をなほとほくして柳の芽

病室の窓の四角や山笑ふ

馬繫ぐ石も天領地虫出づ

# 空集

柴田佐知子選



ぜんざいの好きな植木屋小正月

日本列島冷えていよいよ出口なし

走り根の手強きうねり戻り寒

斧始神酒提げてゆくつづら折

眠りたる山を抜けゆく斧の音

粕屋 長 憲一

チェンソーの響きしのに雪しづる

尾根に立つ鹿ごと山の吹雪きけり

吹雪きぬる尾根より牡鹿下りてきし

雪の尾根越えきし鹿の声ならむ

初仕事妻に上げやるファースナー

脇宮は石を神とし下萌ゆる

行橋 安武晨子

水仙や一壺となりし子を抱き

悴みし唇は誦経をもてほぐす

納骨を延ばす春日のとどくまで

懸想文買うてやりたし我も欲し 福岡 中条さゆり

ひいふうみいとんでここのつ廻し猿

猿廻し猿の機嫌のままならず

濡れてなほ木目浮き立つ飾曰